《公開講演会記録》

莫言と村上春樹チルドレン
――現代中国文芸界をめぐって

東京大学文学部教授　藤井省三

現代中国文芸界における「純文学」の風景は、大別して、いかに近代化の洗礼を受けようともなおも土着文化を色濃く保つ農村を描く作品群と、日本・欧米のポストモダン文化を大胆に取り込んでグローバル化した都市を描く作品群との二種により、構成されているのではあるまいか。そして土着派文学の代表的作家が莫言（モーイエン、ばくげん、１９５５～）であるとするならば、グローバル派文学の代表的作家が安妮宝貝（アンニー・パオペイ、Annie Baby、アニー・ベイビー、１９７４～）ら村上春樹チルドレンといえよう。

本稿では土着派莫言とグローバル派村上チルドレンという中国文芸界の両極をご紹介したい。

(1) 莫言――中国農民の情念を描く農民作家としての出発

中国の村から現れた魔術的リアリズムの作家莫言が、ノーベル文学賞を受賞した。中国語作家としては２０００年受賞の高行健（カオ・シンチエン、こうこうけん、１９４０～）に続く2人目であり、中国国籍の作家としては初めての受賞である。

私の莫言文学の読書歴は25年、中国のメディアも含めて最初に彼に対し本格的インタビューを行ったのは、おそらく私であろう。莫言の故郷の山東省高密の村まで、彼の父上と兄上たちを訪ねたこともあり、今でも東京や北京で毎年のように顔を合わせている。

さて莫言の経歴をめぐって、かつて中国共産党直系の文芸誌『人民文学』に奇妙な作家紹介が載ったことがある。それは莫言の長篇小説『歓楽』末尾に付されたものだ。

「莫言　山東省高密県の人。１９５５年生まれ。幼少より共産党を熱愛し、祖国を熱愛し、人民を熱愛し、労働を熱愛した。一個の光栄ある解放軍兵士となることが彼の生涯の望みであったが、兵隊になると共産党に入党したくなり、入党すると士官になりたくなり、士官になると今度は小説を書いて中国作家協会に潜り込みたくなった。現在彼は真面目にマルクス・レーニン主義を猛勉強し、誠心誠意祖国に尽くしたいと思っている。暮らしが厳しかった時期に、飢えのため彼の頭はおかしくなり、神経系統は余り正

常でなく、好んでまかせを言うが、口に出すとすぐに忘れてしまう。彼は批判精神と自己批判の精神とに富み、真理に対しては潔く投降してしまう。批判はむしろ歓迎するところで、恨みに思ったことはない。」（1987年1・2月合併号）

1991年12月に、私が北京で初めて莫言に面会しインタビューした時、冒頭で「これは莫言さん自身がお書きになったのですか」と確認したところ、〝山東大人〟風の大柄な彼が、あの大きな顔に悪戯っ子のような笑顔を浮かべて「そうです」と肯定していた。

それから彼は、私が東京から持参した中華民国24年（1935）刊行の『高密県志』に収録されていた古地図を前に、農民作家として自覚を詳しく語ってくれたのである――彼の故郷は高密県新安郷の大蘭で、高密の東北端にあるので小説では〝東北郷〟と称すること、生まれ落ちたときから青春期までの20年を高密県の農村で過ごし、その体験は彼の創作活動に大きな影響を与えていることを……

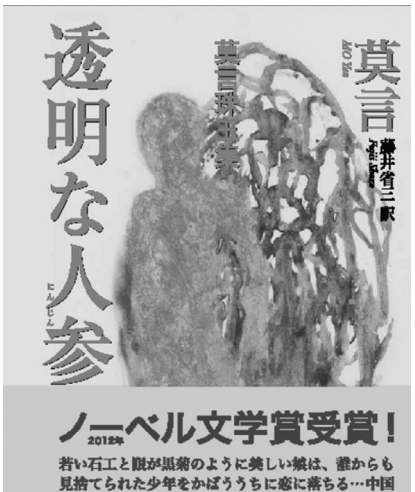
「私は農民の子供として生まれ、小学校も中退で、幼年期から農作業をしてきましたから、農民の思考、行動様式が身に染み着いています。農民の願望、現代の農民の情念にたいへん近いものを抱いています。私の眼差し、感受性は農民のそれです。」〔注：「特別インタビュー　莫言　中国の村と軍から出てきた魔術的リアリズム」『海燕』1992年4月号〕

莫言の父は人民共和国建国前には豊かな自作農であったため、建国後の毛沢東時代には政治闘争の対象となり、財産も収奪された。これについて彼は次のように述べている。

「建国後には中農など豊かな農家の子供たちは苦難の日々を過ごしました。常に人より一歩下がっていませんと労働改造〔注：懲役受刑者を、生産労働と政治教育により更生させる制度とされるが、強制収容所の側面もある〕に送られてしまうのです。……中農の子弟はあらゆる機会に差別を受け、出口無しの状態でした。プロレタリア専制下での抑圧であり差別であったのです。」

文化大革命（1966～76）が始まった頃、莫言はある日お腹が減ってどうにも我慢できず、人民公社の畑からニンジンをひっこ抜いて食べたところ、これが見つかってしまい、この厳粛なる文革の最中に公社の生産物を盗むとは何事かと村人たちの前で共産党支部書記から叱責され、毛沢東の肖像画に向かって跪き「毛主席、私はニンジンを一本盗みました。この罪は死んでも償い切れません」と謝罪させられたという。

父親も「毛主席に謝罪させられるような大それたことをするとは何事だ」と激怒し、塩水につけた荒縄で莫言少年を殴り始めたところに、祖父が駆けつけ「たかがニンジン一本でこんな折檻をすることもなかろう」といって助けてくれたのだった。祖父は常々「人民公社なんぞウサギの尻尾のようなもの。長く伸びるはずもない」と言っていたというが、確かに文革終了後数年で人民公社は解体され、農地は農民に再分配されたのである。このニンジン事件は後に、莫言の中央文壇デビュー作『透明な人参』に結晶するの



『透明な人参』日本語訳の表紙

である。

そして莫言は自ら苦労した人民解放軍入隊体験を、次のように語ってもいた。

「当時農村では、物質面で暮らしが非常に厳しかったので、衣食が保証されている軍隊はたいへん魅力的な社会でした。しかも士官に抜擢されれば戸籍を農村から移すことが出来ます。村から出る唯一の方法が入隊だったのです。そこで入隊希望者が非常に多く、各農村から入隊できる定員は毎年1人かせいぜい2人といった状態でした。入隊できる者はまず〔人民公社の〕幹部の子弟、次に出身家庭の良い〔注：労働者、兵士、革命幹部、革命烈士そして貧農・下層中農を指す。いわゆる〝紅五類（赤い五種）〟〕子弟でして……募兵があるたびに私は申し込みました。毎年毎年です。そして四年目にあまり正常ではない手段によって採用になりました。農村の幹部に賄賂を贈り買収したのです。ただし入隊後はこうした出身による差別はほとんどありませんでした。」

こうして１９７６年に解放軍の一兵卒となった莫言は、やがて分隊長に昇進し図書管理員などの職を歴任したのち、創作を開始した。最初の短篇は解放軍の隔月刊文芸誌『蓮池』１９８１年第５期に発表した『春の雨降る夜に』である。創作の動機について莫言は１９９９年10月の来日時に京都大学で行った講演で、原稿料でピカピカの革靴や上海ブランドの時計を買って、故郷の村の娘たちに自慢したかったのだが、自分を眺めてくれたのは老婆数人だけだった、とユーモアたっぷりに語っている。

毛沢東は日中戦争中の１９４２年５月、文芸座談会を召集し、文学・芸術とは抗日戦と解放運動を闘う労働者・農民・兵士の要求に応じて大衆政治家の意見をまとめあげこれを精錬し、再び大衆に戻すこと、すなわち共産党の政策を民衆に宣伝啓蒙し、民衆の要求を党に伝えるメディアであると規定した。これは『文芸講話』と呼ばれ、その後久しく共産党の文学・芸術に対する基本政策となっている。

莫言は「マルクス・レーニン主義を猛勉強し、誠心誠意祖国に尽くしたい」と思っていたというものの、おそらく『文芸講話』の理論で、農民の情念と論理をどこまで語れるのか、と悩んでいたのではあるまいか。

やがて１９８４年のある冬の夜、莫言は川端康成の『雪国』を読みはじめて、「黒く逞しい秋田犬がそこの踏み石に乗つて、長いこと湯を舐めてゐた」という一節に至ったとき――これは語り手の島村が芸者の駒子と再会するあたりの描写だが――突然、小説とは何か、を悟って感激にうち震え、激しい興奮を覚えたという。「犬も文学に書けるし、お湯も文学に書けるのだ！」

こうして読みかけの『雪国』を放りだすと「高密県東北郷原産の大きく白い従順な犬は、何代も続くうちに純血種は殆ど見かけなくなった……」という一行を書き出したのである。これが１９８５年４月執筆と思われる珠玉の短篇『白い犬とブランコ』となるのだ。同作は初めて高密県東北郷を舞台とした莫言作品で、魯迅の『故郷』を彷彿とさせる帰郷の物語である。

主人公で北京の芸術専門学校の講師をしている青年は、10年ぶりに故郷の村に帰り、高く生い茂るコーリャン畑に囲まれた橋のたもとで、重いコーリャンの葉の束を背負い白い老犬に先導された片目の農婦に出会う。少年時代、彼が幼なじみの少女と村の広場に設営されたブランコに相乗りしていたときロープが切れ、彼の家の白い子犬を抱いていた少女が失明した。いま出会った農婦こそその少女であった。彼女は隣村の聾唖者に嫁ぎ三つ子を生んだが、３人とも父の遺伝で聾

唖。彼女の家を訪ね、粗暴ながらも心根が優しく働き者の夫や幼い3兄弟と会い、青年の心も慰められる。彼女が老犬を連れて用事で町へ一足先に出かけたのち、青年も家を辞去すると、意外にも橋のたもとでは白い犬が彼を待っているのであった。老犬に導かれるままコーリャン畑を踏み分けていくと……

『白い犬とブランコ』は文革期と80年代とを行き来しながら、貧困から小康へと経済成長していく農村社会と、思春期から大人へと成長する男女の心理の綾を描き、1989年に台湾の『聯合報』小説賞を受賞している。ちなみにこれは莫言が初めて得た外地の文学賞である。同作は同時期の作品『透明な人参』『古い銃』『秋の水』などとともに莫言第1短篇集『透明な人参』（北京・作家出版社、1986）に収録された。中国農民の情念を鮮烈に描き出したこれらの短篇群は、農民閏土がほとんど内面を語ろうとしなかった魯迅『故郷』とも対照的である。

『豊乳肥臀』の表紙

(2) 莫言独自の中国魔術的リアリズム

こうして川端康成『雪国』が触媒として作用し、莫言は〝東北郷〟に象徴される自らの物語世界を発見するに至ったが、彼が農民の情念を父祖の代にまで溯って語るためには、さらに広大な時空を縦横に往来する長篇小説の技法も必要であった。それを莫言は南北アメリカ文学から探り出すのである。

莫言は1991年のインタビューで、84年に解放軍芸術学院に入学し、外国文学の講義を受けたこと、川端文学を読んだのもその時であったことを語ったほか、私の「アメリカ南部の作家フォークナーおよびラテンアメリカ文学のガルシア・マルケスのどのような作品を読みましたか」という問いに対し次のように答えている。

「たとえばマルケスの『百年の孤独』です。これは2、3ページ読むなり衝撃を受けまして、頭の中がどうしようもない興奮状態となってしまったのです。あっという間に私の頭の中で静まっていたありとあらゆる現実が照らし出され、それぞれが自在に動き始めました。私は一刻の猶予もならず筆を執るや原稿用紙に向かったのです。とても一冊読み通して勉強するなどという精神状態ではありませんでした。マルケスの物語自体は私にとってそれほど新鮮なものではなかったのですが、小説の手法というか思考の回路にたいへん啓発されたのです。」

中華民国時代の高密県東北郷を舞台に興亡する一族波乱の半世紀を孫の代の「私」が語る、という『赤い高粱一族』物語は、こうしてマルケスを触媒として生まれたようすである。同作は目まぐるしく交錯する叙述の時空、拍案驚奇のエピソードをてんこ盛りにした豪快にして繊細な作品である。1920～40年代初期の山東省高密県東北郷自営農民の最も輝かしい時代を描きながらも、その冒頭では「今を生きる私たちこの不肖なる子孫のぶざまさを際だたせるのであり、進歩と同時に私は種の退化を痛切に感じるのである」という挫折感を語っており、全編に荒涼たる喪失感を漂わせている。このようなフラッシュバックの手法や入れ子状の物語構造に関しては、莫言は次のように語っている。

「フラッシュバックは修飾のための手

法と思っています。入れ子状の構造というのは、おそらく私の頭の中にお話が余りにたくさん詰まっているためではないでしょうか。ある一つの筋を書いているうちに、別の筋が頭の中に浮かんでくると、私はそのことを書かずにはいられなくなります。それを書き終えてからまたもとの筋に戻るのです。こんな具合で、頭の中にお話が詰まりすぎているのです。」

つまり莫言の頭の中に中国農民の情念と歴史の記憶を土壌とする豊饒なる物語の森が生きており、それを彼の筆が描き出す時、中国的魔術的リアリズム作品となるのである。

続けて１９９２年に脱稿する『酒国』は、大鉱山の街酒国市で政府幹部が酒宴を開いては、農村から購入した幼児の人肉料理を食べているとの情報を得た特捜検事による潜入捜査の物語だ。「莫言」という語り手による捜査経過の叙述、酒国市醸造大学の院生兼小説家志望の李一斗と莫言との往復書簡、そして李が研究室収蔵の洋の東西の銘酒を盗み飲みしながら書き上げて莫言に送りつける奇怪な短編小説群という３重のテクストから成り立ち、中国魔術的リアリズムの極北として高く評価できよう。莫言自身も99年の京大講演で「私の作品のなかで、もっとも完成度の高い長編小説だと考え、誇りをもっています」と述べている。

『豊乳肥臀』（１９９６）も高密県東北郷を舞台として、日中戦争から改革・開放が本格化する80年代半ばまでを描いている。日本軍が東北郷に侵攻してきたその日、18歳を頭とする７人の娘を持つ農婦がスウェーデン人宣教師との奔放な不倫により宿した男女の双子を生む。一族待望の男児にして語り手の「私」は母の豊かな乳房を独占し、７歳になりその乳が枯れたのちも羊の乳を飲み続ける。いっぽう東北郷の男たちは次々と抗日軍を組織し、母から豊かな乳房と肝っ玉を受け継いだ姉たちは戦乱期の有力者たちと愛し合う。乳房コンプレックスの「私」による豊かな乳房に肥えた尻を誇る母や姉たちの数奇な生涯をめぐる物語を通じて、農民英雄たちの日中戦争期の戦いぶりから、人民共和国建国後の悲惨な末路までを描き出すのだ。

『白檀の刑』（２００１）も高密県を舞台として、19世紀末に鉄道、大砲の轟音と共に侵攻するドイツ軍とこれに迎合する野心家袁世凱に対し、ニャンニャンと伝統歌舞劇「猫節」の歌声で抵抗する中国民衆、およびその牧民たる知事の責務と清朝への忠誠との間で苦悩する県知事らを描く。莫言最初の歴史長篇小説として注目されている。

『赤い高粱一族』『酒国』『豊乳肥臀』『白檀の刑』の４大長篇が、莫言の中国魔術的リアリズムの代表作といえよう。

(3) 東アジアにおける村上春樹

村上春樹は日本の現在を東アジアの時間と空間に位置づけた作家であり、東アジア共通の現代文化、ポストモダン文化の原点となった作家である。

実際に村上文学の主人公は東アジアの歴史の記憶を辿る大小の冒険を繰り返してきた。デビュー作『風の歌を聴け』（１９７９）の「僕」は、「ジェイズ・バー」のマスターに「上海の郊外」で「終戦の２日後に自分の埋めた地雷を踏ん」で死んだ叔父のことを語っている。その彼を「そう……。いろんな人間が死んだものね。でもみんな兄弟さ。」とやさしく受け止めてくれる中年の男のジェイは中国人である。実は彼は朝鮮戦争とベトナム戦争という中米両国激突の時代に在日米軍基地で働いていたのだが、そんな暗い過去を明らかにするのは、「僕」とその親友の「鼠」が満州国の亡霊と対決する『羊をめぐる冒険』（１９８２、以下

「『羊』」と略す）であった。ちなみにこの冒険物語の前作『１９７３年のピンボール』（１９８０）で、「鼠」はジェイの住む港街を後ろ髪を引かれる思いであとにしている――「ジェイ……。／何故彼の存在がこんなに自分の心を乱すのか鼠にはわからない」。

このように村上春樹のいわゆる青春３部作（１９７８～１９８２）とは「僕」とその分身「鼠」、そして２人よりも20歳年長である中国人ジェイの３人が語りあう歴史の記憶なのである。これに続く『ねじまき鳥クロニクル』（１９８６～94）はノモンハン事件と満州国の記憶を辿る物語であり、『中国行きのスロウ・ボート』『トニー滝谷』などの短篇小説群は中国への贖罪の意識、歴史忘却への省察であり、『海辺のカフカ』（２００３）や『アフターダーク』（２００４）は、たとえば香港では「内心に潜在する暴力の種を反省するよう日本人に呼びかける」作品として読まれている。

『ノルウェイの森』の訳本各種

その一方で、中国・香港・台湾の中国語圏では村上受容の４大法則が見いだされる。「村上春樹現象」は第１に台湾→香港→上海→北京と時計回りに展開し、第２に台湾であれば89年、上海であれば98年と各地で高率の経済成長がほぼ半減する時期に発生している。また中国語圏では（韓国も同様だが）80年代末に民主化運動が勃発しており、無血の改革により民主化を実現した台湾と、あの悲惨な１９８９年６月４日天安門事件で民主化の展望を失った中国と明暗を分けた。それでもこの民主化運動が各地の村上受容に、濃淡の差はあれ強い影響を与えている。私は拙著『村上春樹のなかの中国』（朝日選書）で、これらを「時計回り」「経済成長踊り場」「ポスト民主化運動」の３法則と呼んでいる。

そして第４の法則が「『森』高『羊』低」である。日本では『ノルウェイの森』（１９８７、以下「『森』」と略す）をきっかけとして村上ブームが起きたが、英訳はむしろ『羊』が先行して１９８９年にアルフレッド・バーンバウム訳が出ており、『森』は２０００年に英語版が刊行された。『羊』高『森』低の傾向はフランス、ドイツ、ロシアでも同様で、それぞれ『羊』の１９９０、91、98の各年刊行に対し、『森』のほうは１９９４、２００１、03の各年と４年から10年遅れで刊行されているのだ。『ねじまき……』『海辺……』も欧米では高い評価を受けており、世界文学において村上とは東アジア史をめぐる日本人の記憶を欧米人に語る作家とも位置づけられよう。この点も評価されたのであろう、この数年、ノーベル文学賞の季節を迎えるたびに有力候補の一人としてHaruki Murakamiの名が挙がっているのである。

これに対し台湾・香港や韓国での村上ブームは、１９８９年に「１００％純情率直」（台湾版のコピー）と称される『森』翻訳版の大ヒットから始まった。

そのいっぽうで『羊』の翻訳は遅れて、台湾では頼明珠訳が１９９５年に、中国では林少華訳が１９９７年（韓国語訳も同年）刊行と『森』よりも数年あと回しにされたうえ解説も省略されるなど、冷遇されている。

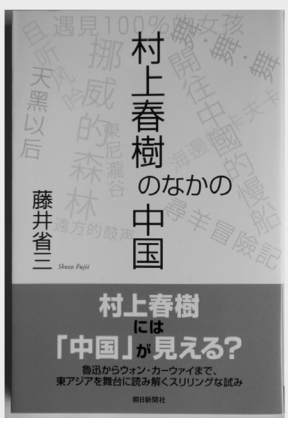
中国語圏の村上受容には４大法則が共通するいっぽうで、明らかな相違点も見いだせる。台湾ではお洒落なカフェ「ノルウェイの森」や「海辺のカフカ」が若者の人気を集め、高級マンション「リッチ村上」が中年の購買意欲をそそるなど、村上ブームは文学の枠を超えて社会現象となっている。香港ではウォン・カーウァイ（王家衛、１９５８年上海生）が『森』を読んで名作『恋する惑星』を撮り、アート系監督へと脱皮するなど、映画界への影響が顕著である。中国では『上海ベイビー』衛慧（ウェイ・ホイ、えいけい、１９７３～）や『さよならビビアン』の安妮宝貝（アニー・ベイビー、１９７４～）ら、村上チルドレン作家が活躍している。

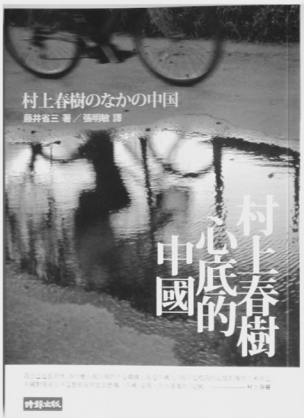
東アジアにおける村上ブームはこの地域で戦後長らくモダン・クラシックと見なされてきた魯迅（ルーシュン、ろじん、１８８１～１９３６）を連想させる。実際、村上は高校時代に魯迅を愛読していたようすで、その影響のあとは『風』から『１Q84』に至るまで、随所に色濃く出ているのである。

⑷ 中国の村上チルドレンと日本の「中国村上チルドレン」のチルドレン

中国の村上春樹チルドレンの一人が衛慧（ウェイ・ホイ、えいけい、１９７３～）で、代表作は『上海ベイビー』である。この小説は、中国では過激な性描写のため発売禁止になったが、韓国・欧米で大いに話題になり、日本でも同書翻訳が30万部も売れて国民的国語辞典『広辞苑』第６版に「衛慧」で立項されている。ちなみに『広辞苑』は日本人は物故者のみを立項するが、外国人は健在の方でも立項している。

参考文献：藤井省三著、張明敏訳『村上春樹心底的中国』





藤井氏の著書

『上海ベイビー』（桑島道夫訳、文春文庫）は、ココというニックネームの女性主人公「私」により語られる物語で、そのあらすじは以下の通りである。ココは上海の名門校復旦大学を卒業後、出版社の編集者をしていたが、どうしても作家になりたくて、エリート街道からドロップアウト、昼は喫茶店でウエートレスのアルバイトをして、夜に小説を書いていたところ、喫茶店の常連客の天天から求愛され彼の高級マンションで同棲し始める。天天は高校卒業後も働かず、大学にも行かず、好きな絵――素人としてはなかなかいい絵――を画いて暮らす高等遊民で、スペインに出稼ぎに行っている両親の送金で暮らしている。ところが父が突然の不審死を遂げ、母がスペイン人コックと再婚したため、天天の父方の祖母は、うちの嫁が保険金殺人をしたのだと言い、天天はそれがショックで性的不能者になっていた。このため天天とココとは深く愛

し合っているが、性的関係はない。ココは天天と同棲し始めた後は、昼は小説を書いて夜はバーに遊びに行くようになり、ドイツ人商社マンのマークと知り合い、トイレでファックしてしまうという過激な関係になっていく。こうしてココを中心に形成される天天との精神的結合、マークとの肉体的結合という三角関係は、『森』のワタナベ君と直子および緑との関係を男女を逆にしたものであり、『上海ベイビー』に対する『森』の影響が想像される。

安妮宝貝（アンニー・パオペイ、Annie Baby、アニー・ベイビー、１９７４～）は、中国の若い女性の間で最も人気を博している作家で、『さよなら、ビビアン』（２００２年）という短編集でデビューした。彼女は大学卒業後に銀行員をしながら、短編小説をネットに連載して話題になり、職業作家になったのである。その文体といい、上海の「小資（プチブル）」として豊かだが孤独で物憂い暮らしを送る登場人物たちといい、登場人物名を漢字ではなくローマ字で表記するなど、村上春樹の影響が色濃い。

衛慧や安妮宝貝がいわゆる「70後」世代（１９７０年代出生世代）とすると、田原は「80後（ポストエイティーズ）」というさらに若い世代の作家である。高校時代に村上春樹を耽読して『ゼブラの森（原題：斑馬森林）』という小説を書いてデビューし、さらにロックグループのボーカルとしても有名になり、外国語名門校である北京語言大学の学生時代には香港映画にも出演して映画女優にもなった。彼女は日本では代表作の翻訳『水の彼方 ～Double Mono～』（泉京鹿訳）が講談社から出ているほか、ロック歌手としても有名で、サイトを開くと、熱烈な日本人ファンが田原絶讃の文章を書きこんでいる。

東大中文研究室では日本・中国・台湾の院生が２０１１年６月に「東大中文村上春樹研究会」を立ち上げて、活発に活動している。その会員の多くが、村上春樹および中国・香港・台湾・韓国の村上チルドレンに深い関心を寄せ、自分らの研究テーマとしているのである。

前述のとおり「中国語圏における村上受容４大法則」の一つとして、80年代後半以来「時計回りの法則」に従い、東京から始まったブームが台湾→香港→上海→北京へと伝播した。その時計針がさらに進んで周回を終え、今や日本に帰って来ているのである。いわば村上ブームが東アジアを一周したのち、村上チルドレン・ブームへと膨らんで日本に戻ってきたのだ。これからの日本では、中国の村上チルドレンを読んで批評家や作家になる人が出てくることであろう。それは村上春樹の孫たち、東アジアの村上グランド・チルドレンの誕生である。東大中文村上研究会は村上春樹からそのグランド・チルドレンまでを研究対象としている一方で、研究会自らもグランド・チルドレンなのである。

本稿では紙幅の関係で、莫言についても中国の村上春樹現象についても、十分には語れなかった。詳しくは拙訳の莫言短篇集『透明な人参』（朝日出版社、２０１３年）収録の解説「莫言の人と文学」および拙著『村上春樹のなかの中国』（朝日選書、朝日新聞社、２００７年）をご参照いただきたい。

（２０１２年12月19日・アジア研究懇話会）

講師略歴（ふじい　しょうぞう）

１９５２年　東京都生まれ
東京大学大学院博士課程修了
中国文学専攻　文学博士
著書『現代中国文化探検』『台湾文学この百年』ほか多数
訳書　魯迅、莫言の作品など多数